

平成25年(2013年)4月4日(木曜日)

(第三種郵便物認可)

時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学
研究所副所長・教授



今年も花ざかりの時期がやってきた。毎年この時期になると心落ち着かないと言う人も多い。しかし人はなぜ花をこつも愛でたがるのだろうか。もう十年近くも前、私が務める研究所の当時の所長だった故日高敏隆さんにこの疑

問をぶつけて、おおがかりなシンポジウムを開いてもらったことがある。結論はむろん出なかったが、色々な分野の専門家が、ああでもない、こつでもないと言っており、ずいぶん面白いシンポジウムになった。
こつした問いにはむろんひ

花を愛でる心

とつだけの正解などない。見る角度が変われば答えも当然変わるわけだが、わたしはやはりそこに里山の存在が大きく関わっていると思う。里山のおこりは人が定住生活をす

るようになり、周囲の環境を作り変え始めた時に始まる。深い森がひらかれ、長い時

どのかかわりが深いからだる。こつしてみても、花は人に誘われ、逆に人は花に誘われてきたことがわかる。どの土地でも、花は、「新

記憶重なり思い出醸成

間を生きてきた巨樹たちに代わって、より寿命の短いさまざまな樹木や草の仲間が増えるようになる。命の終わりに花を咲かせ種子を残すのが植物の宿命だから、こつした植物の増加はそのまま花の増加につながる。

人のおこないが花咲く里をもたらしただのである。花のつ

緑や「紅葉」などと違い、その時期がはっきり決まっている。花暦のゆえんである。去年この花が咲いたころは何をしていたとか、人生の節目となったあの出来事が起きたときにはあの花が咲いていたなどという記憶が重なり、思い出が醸成されてゆく。私は、人びとがこつに年齢を重ねて

執筆者略歴

◇さとう・よういちろう 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「コシヒカリより美味しい米」(朝日新書)など。